

エジプトの踊り子たち

—デュ・カンとフロベールの旅行記における描写の比較—

渡 辺 采 香

本発表では、女性ダンサーの描写に注目し、マクシム・デュ・カン (Maxime Du Camp, 1822-1894) とギュスターヴ・フロベール (Gustave Flaubert, 1821-1880) によるエジプト旅行記の比較を行った。

19世紀フランスにおいて、オリエントへの旅行と旅行記の執筆は作家にとって通過儀礼的な意味合いを持っていた。作家たちによる旅行記には、ほぼ必ず現地女性が登場し、中でもエジプトの女性ダンサーたちは盛んにとりあげられた。そのような背景のもと、オリエント旅行の一環としてエジプトを訪れたデュ・カンとフロベールはそれぞれ旅行記を執筆し、その中で女性ダンサーをとりあげている。

比較の前提として、まず、デュ・カンとフロベールの旅行記は対照的な性質を持っていることを指摘した。文学者としての社会的成功を目論むデュ・カンは、旅行記を『ナイル河 (エジプトとヌビア)』(*Le Nil (Égypte et Nubie)*, 1854) と題し出版した。一方で、フロベールは自らの旅行記を生前出版することはなく、個人的なノートにとどめた。2人の旅行記における興味や関心、美的感覚も大きく異なっていると『近代フランスの誘惑 物語・表象・オリエント』における小倉孝誠をはじめ複数の研究者が指摘している。

また、ガリマール版 *Voyage en Orient* (2006) の Gothot-Mersch による序文において、彼らが旅行前にさまざまな資料を渉猟したことが明らかにされている。フロベールが参照した資料である『現代エジプト人の風俗と習慣』(*An Account of the Manners and Customs of the Modern Egyptians*, 1836)、『エジプト誌』(*Description de l'Égypte*, 1836) には女性ダンサーに関する詳しい記述がある。それらの資料では、ダンサーたちの社会から尊敬される職業的芸人としての面と、軽蔑される娼婦としての面が示されている。

デュ・カンの『ナイル河』では、女性ダンサーたちのエロティシズムに関する言及は抑えられ、彼女たちは職業的な踊り手、歌手として紹介されて

いる。他方、フロベールは露骨なまでの性的描写を行い、ダンサーを娼婦と同一視している。このように、女性ダンサーに関する描写の傾向は異なるが、共通点も複数存在する。それぞれの旅行記では現代エジプトの女性ダンサーが古代や聖書の世界と関連づけられている。また、アラブ人とヌビア人の踊りが比較され、後者を描く際に「未開」の要素が強調されている。更に、両者ともに踊り手や空間の異国情緒や官能性に言及するものの、踊りそのものの官能性、猥雑さの強調は見られない点が挙げられる。これらは19世紀におけるフランスでのオリент女性の表象と関連づけて考えられるべき点である。

今後は本発表で明らかにしたことを当時のフランスの社会的潮流、価値体系と結びつけ考察し、2人の作家がそれらをいかに反映しているか、もしくはそれらといかに異なっているかを明らかにしたい。